

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

| | |
|-------|-------|
| 都道府県名 | 高 知 県 |
|-------|-------|

学校の概要（平成15年4月現在）

| | | | | | | | | | |
|-----|------------|----|----|----|----|----|------|-----|-----|
| 学校名 | 高知市立一ツ橋小学校 | | | | | | | | |
| 学 年 | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 |
| 学級数 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 0 | 12 | 17 |
| 児童数 | 46 | 53 | 65 | 58 | 47 | 55 | 0 | 324 | |

研究の概要

1. 研究主題

児童一人ひとりの学力向上
 ～聞く、話す、書く、読む力を基本としたコミュニケーション能力の育成～

2. 研究内容と方法

（1）実施学年・教科

・ 1～6年生・国語
 本校では、「学力」を、特に「聞く、話す、書く、読む」力と捉え、それらを基本としたコミュニケーション能力の育成が重要だと考えている。子どもたちが将来にわたって生きていく上での基礎となる言語能力や人とかかわる力、人と交わる力を向上させていく必要がある。

・ 3・4年生・算数
 多くの児童は、かけ算、九九よりも除法に戸惑うことが多い。そこで、九九の習熟を図りながら、一番つまずきの多い3年生の算数の手厚い指導を行うことにした。さらに、学習指導要領の改訂に伴い、小数と分数が4年生に引き上げられたので、4年生の算数についても指導の充実の必要があると考えた。

（2）年次ごとの計画

| | |
|--------|--|
| 平成15年度 | <p>テーマ 聞く、話す、書く、読む力を基本としたコミュニケーション能力の育成 研究の見通し(仮説) 自分を大切にす気持ちや、人との心のつながりの良さを感じる集団の中で、意図的・継続的に「聞く、話す、書く、読む」場を設定していけば、相手意識をもったコミュニケーション能力の育成を図ることができるのではないか。</p> <p>研究の内容・方法 (1) 研究推進体制の工夫 ・ 系統性を重視した低学年、中学年、高学年の3ブロックの体制 ・ 各ブロックからの代表と、研究主任、教務主任、教頭、校長からなる研究推進委員会の機能の充実 ・ 専門性を活かしたTT教員と、学級担任による連携を重視した授業計画</p> <p>(2) 研究の実際 (ア) 具体的な到達目標の作成、修正 ・ 聞く、話す、書く、読む能力及びコミュニケーション能力の育成に関する能力を系統的に捉え、具体的な子どもの姿で到達目標を作</p> |
|--------|--|

成し、必要に応じて修正をしてきた・・・[資料]

- ・ 研究授業を行う際には、本単元及び本時の評価規準を具体的な子どもの姿で明確にするようにしてきた。

(イ) 授業形態の工夫

- ・ 算数担当教員と学級担任が行うTT授業(3・4年生)・・・単元に応じて

授業は主に算数担当教員が進め、学級担任は、主に個別指導にあたり、個の意見を算数担当教員に伝えたりして、共に授業を構成しながら進めている。算数担当教員の専門性を生かしながら、児童一人ひとりの様子をより詳しく知っている学級担任との連携により、充実した内容かつ、きめ細かな対応による授業が展開できた。

- ・ 少人数による指導(3年生)・・・単元に応じて

3年生の子どもたち65名を、3つの学習集団に分け、学級担任2名と算数担当教員で指導した。単位学級の人数は10名程度少なくなり、操作活動などの見届けが、よりきめ細かにできた。また、同じ指導案で3名の教員が授業を行うことで、その内容の検討が深まり、より良い指導計画への見直しができた。

- ・ 取り出し指導(4年生)・・・単元に応じて

学習の習熟度に遅れがみられる児童に対して、個の「つまずき」に対応し、学級担任が1対1の授業を行い、算数担当教員が、他の児童を指導する学習形態も試みた。児童一人に対して、学級担任が一人ついて指導するので、その子なりの習熟度に合わせた指導ができ、児童の学習意欲が高まっている。

- ・ コース別学習(4年生)・・・個の「つまずき」に応じて

個の「つまずき」を予想し、事前に、その「つまずき」に対応した学習コースを準備し、指導した。

(ウ) 個に応じた学習課題の提供と評価

- ・ 1学期の実態を考慮して、一人ひとり違う内容の夏休みの宿題「算数プリント集」を作成(3年生と4年生)・・・[資料]

3年生は28種類のプリントから一人12枚を、4年生は31種類のプリントから一人12枚をそれぞれ綴じて夏休みの宿題とした。中には、個々の学習状況に応じて、補充的な内容や発展的な内容を含むプリントを準備した。

[資料]は、誰にどんなプリントを準備したか、その一覧表である。

- ・ 学期ごとの評価では、一人ひとりの学習状況を一覧表にした。

CRTの結果と比較したり、1時間ごとの学習記録を見直したりするなどして、一人ひとりにコメントをつけ、それを一覧表にした・・・[資料]

(エ) 子どもの学習感想を生かした授業評価の取り組み

- ・ 「今日の授業は楽しかったですか」「自分の考えを相手に分かるように話すことができましたか」「友だちの考えを自分でも考えながら聞くことができましたか」「自分の考えを分かりやすくノートに書くことができましたか」などの項目に対して「はい」「いいえ」で答えた授業評価の集計や、自由記述による感想をもとに、授業研究を行い、授業を改善するように努めた。

(オ) その他

- ・ 本校の研究の特色は、次の4点である。

日頃の1時間1時間の授業こそを最大限に大切にします。

誤答こそ「理解を深めるチャンス」として活用する。

年度当初のCRTをもとに個に応じた指導方法を考え、3学

| | |
|----------------|--|
| 平成 15 年度 | <p>期にC R T を行い、個の伸びや学級全体の伸びなどを統計的に検証する。</p> <p>学力向上に向けての取り組みを地域・家庭などに公開する。</p> <p>このうち、 の「誤答」について、例えば、テストの無答にしても、全く分からず出来なかったのか、出来る力はあるが時間が無くて出来なかったのか、同一に扱うことは出来ない。</p> <p>4年生の「わり算の筆算」を例にして考えても、商が正しく立たないのか、正しく商を立てても九九で間違えたのか、引き算で間違えたのか、「誤答」から、個の傾向が分析できる。それらを記録することによって、個に対応する方途が見えてくるのである。テストなどのプリントだけではない。授業においても、「誤答」が出た場面こそ「理解を深めるチャンス」として活用している。したがって、「違いま～す」「え～」などの合唱が起きることは全く無い。</p> <p>さらに3年生の「表とグラフ」の学習場面を例に紹介しよう。棒グラフの棒の人数を答える場面であった。直前に「横の数字を見ると早く数えられる」と指導していた。1目盛りが2人で、12人を表示しているのに、Kさんは「11人」と答えた。そこで、Kさんは「なぜ、Kさんは、11人と間違えたのだろう」と想像させた。そして、「Kさんは、ちゃんと横の数字を見て早く数えようとしたけれど、1目盛り2人を1人と勘違いしたんだ」と考えることができ、「誰もが間違いやすい部分だね」とまとめることができた。</p> <p>このように、誤答の原因を想像して共有することで、クラス全員が理解を深めることが出来ると考えている。さらに、教師が意図的に「誤答」を提示し、「想像」「共有」というステップから理解を深めさせようとすることもある。</p> |
|----------------|--|

| | |
|----------------|--|
| 平成 16 年度 | <p>テーマ</p> <p>聞く、話す、書く、読む力を基本としたコミュニケーション能力の育成 研究の見通し(仮説)</p> <p>自分を大切にす気持ちや、人との心のつながりの良さを感じる集団の中で、意図的・継続的に「聞く、話す、書く、読む」力を育てる到達目標に迫るための重点単元の授業計画の作成・実施・評価・更新を行っていけばコミュニケーション能力の育成を図ることができるのではないか。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>到達目標に迫るための重点単元の授業計画の作成、実施、評価、更新の実施 児童一人ひとりの実態をより詳しく正確に分析し、個に応じた課題作りや、個の実態の記録を作成</p> |
|----------------|--|

(3) 研究推進体制

| |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・系統性を重視した低学年、中学年、高学年の3ブロックの体制 ・各ブロックからの代表と、研究主任、教務主任、教頭、校長からなる研究推進委員会の機能の充実 ・専門性を生かしたT T教員と、学級担任による連携を重視した授業計画 |
|--|

平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

- ・ [資料]のように、具体的な到達目標を作成することで、1時間ごとの指導内容や必要な活動が明確となり授業効率も向上した。また、この到達目標は、筑波大附属小の白石先生をはじめ、著名な先生方に指導していただく機会を得て、より良いものにできた。
- ・ 児童の実態に合わせた授業形態を工夫することで、個に応じた授業が展開できたと思う。本年度は、3年生の算数科のCRTによって、統計的に検証する予定であるが、まだ、検査結果が届いていないため、ここに記述できないのが残念であるが、おそらく、学力の向上が数値としても明示できると期待している。
- ・ [資料]や[資料]は、特に、児童や保護者の反響も大きく、本校が「学力向上フロンティア推進校」として取り組んでいることへの理解を得られたと思う。さらに、こうした取り組みが、児童や保護者の協力を得られるのだと、私たち教員も学ぶことができた。児童一人ひとりの実態に合わせた「夏休みの課題(プリント)」づくりや、「個の実態の記録」には、苦勞と多くの時間を要したが、逆に、満足感も得られた。
- ・ 本校では、第2校時に研究授業を行い、午後から、その授業の研究会をもつスタイルをとっている。そこで、第2校時の授業終了後、児童が書いた「授業評価」を教頭が集計し、さらに記述文もすべて書き出したプリントをもとに、研究会を行っている。研究会では、主に、そのプリントをもとに活発な意見交流が行われ、児童を主人公とした授業のあり方について話し合われる。こうした研究会のあり方が、私たち教員にとって、常に「授業の主人公は子ども一人ひとりである」という意識の高揚につながっている。
- ・ 本校では、国語力の向上に全教職員一体となって取り組んできた。また、読書活動を重視しており、読書タイム(1日10分)や、保護者、地域の方とともに、子どもの心の居場所としての図書館づくりを行い、本好きな子どもが増えた。

2. 今後の課題

- ・ 具体的な到達目標を児童の実態に寄り沿って見直しをしていく。
- ・ 来年度に向けて個々の教員の専門性を生かし、教科担任制やTT教員の活用方法など研究を深める。
- ・ 児童一人ひとりの実態をより詳しく正確に分析し、個に応じた課題づくりや個の実態の記録を大切にしていきたい。

学力把握のための学校の取り組み

年度当初のCRTを基に、個々の学習状況を把握しその指導方法を工夫する。
3学期に再度CRTを行い、個の伸びや学級全体の伸びなどを統計的に検証する。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- ・ 学校説明会や開かれた学校づくり推進委員会などの場で、学力向上に向けての取り組みを公開する。
- ・ 個人懇談や学級懇談などの場で、学力向上に向けての取り組みを家庭に公開し、連携を深める。
- ・ 3年生の算数科については、3学期にもCRTを行い、個の伸びや学級全体の伸びを統計的に検証し、取り組みの成果を公表する。
- ・ 研究紀要を作成し、必要機関に配付する。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

| | | | | |
|----------------------|----------------------------|-------------------|------------|----------|
| 【新規校・継続校】 | 15年度からの新規校 | 14年度からの継続校 | | |
| 【学校規模】 | 6学級以下 13～18学級 25学級以上 | 7～12学級 19～24学級 | | |
| 【指導体制】 | 少人数指導 一部教科担任制 | T・Tによる指導 その他 | | |
| 【研究教科】 | 国語 生活 体育 | 社会 音楽 その他 | 算数 図画工作 | 理科 家庭 |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | | 有 | 無 | |
